The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『倶舎論』における「毘婆沙師」

齋藤　滋

1．問題の所在

「毘婆沙師（Vaibhāṣika）」とは，「毘婆沙論」に依拠しその権威を認める集団を意味するとされ，説一切有部と同一視されている．世親は『倶舎論』(*Abhidharmakośabhāṣya*) において，経量部 (Sautrāntika) の立場で自説を展開しながら，毘婆沙師（Vaibhāṣika）を論駁している．近年のアビダルマ仏教研究においては経量部について多くの成果が公表されているが，批判対象となる毘婆沙師 (Vaibhāṣika) については，周知のこととして，論じられることがない．本稿では，『倶舎論』における「毘婆沙師（Vaibhāṣika）」がいかなる論師であるのかを明らかにしたい．

2．『大毘婆沙論』における毘婆沙師（Vaibhāṣika）

毘婆沙師 (Vaibhāṣika) は「毘婆沙論」に依拠しその権威を認める集団であるため，その起源は「毘婆沙論」の成立以後であることは疑う余地はない．ここで問題となるのは，毘婆沙師（Vaibhāṣika）なる集団が，「毘婆沙論」が増広される過程において出現したのか，あるいは，「毘婆沙論」が成立して後に出現したのか，ということである．現存する「毘婆沙論」の1本である『大毘婆沙論』の「無記根」に関する記述では次のように述べられている．

【原文】『阿毘達磨大毘婆沙論』巻156，大正26，795a18–19：迦濕彌羅國毘婆沙師説．無記根有三．謂無記愛慧無明．
【現代語訳】カシュミール国の毘婆沙師は説明する．「無記根に三［種］有る．無記愛・［無記］慧・［無記］無明である」と．

ここでは「無記根」には，無記愛・無記慧・無記無明の三種の「無記根」が述べられている．原文には「迦濕彌羅國毘婆沙師説」とあり，この中の「毘婆沙師」の原語に‘Vaibhāṣika’が想定されうる．この無記根の記述は，玄奘訳『倶舎論』にも比類される記述が認められ，「迦濕彌羅國毘婆沙師説」と原文では確認することができる[1]．それゆえ，上記の『大毘婆沙論』の記述にある「毘婆沙師」が

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」の語の初出となり,「毘婆沙論」が増広される過程で,毘婆沙師(Vaibhāṣika)なる集団が出現したとの推測もできよう.しかしながら,『倶舎論』のサンスクリット原典で,この記述に比類される個所をみてみると,

> [偈にある]「その」というのは,無記であることを説示する.カシュミールの人々は「およそ何であれ無記である,渇愛・無明・智慧で,異熟生に至るまでもがすべて,無記根である」と[2].

と述べられており,'Vaibhāṣika' の語を欠いている.また,真諦訳『倶舎釈論』の原文でも「罽賓國師説」とあり,'Vaibhāṣika' に相当する訳語を欠いている[3].それゆえ,『大毘婆沙論』の「無記根」の記述中にある「毘婆沙師」は訳者玄奘による付加の可能性が高い.また,『大毘婆沙論』には,「滅尽定」についての説明の中に「カシュミール国の毘婆沙師は説明する.『一切の菩薩は先に無上正等菩提を証得して,後に滅尽定を起こす』と.」という記述が認められる[4].しかし,当該の個所は,他のテキストに比類することができない.

以上のことから,『大毘婆沙論』に「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」という語を見出すことはできるものの,「毘婆沙論」が増広される過程で,毘婆沙師 (Vaibhāṣika) なる集団が出現したと断定するには根拠に乏しい.

3.「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」の起源と『倶舎論』

「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」の語の初出として断定できるのは,『入阿毘達磨論』にある以下の記述である.

> 【原文】『入阿毘達磨論』巻上,大正 28, 982a21–22: 毘婆沙師作如是説.如蛇在筒行便不曲心若在定正直而轉.
> 【現代語訳】毘婆沙師(たち)はこのような説を作る.蛇が筒の中にいて動かなければ曲がらないように,心がもしも定[の状態]にあれば,まっすぐに[集中していて],しかも転じる.

ここは定 (samādhi) についての記述であるが,「毘婆沙師」が蛇の喩を述べている.チベット語訳『入阿毘達磨論』の当該箇所にも,'Vaibhāṣika' の訳語 'bye brag tu smra ba' が認められる[5].それゆえ,現存するアビダルマ文献においては,『入阿毘達磨論』が「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」の語の初出であると断定できる.しかし,『入阿毘達磨論』で「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」の語が確定できるのはわずか1か所に過ぎず[6],毘婆沙師 (Vaibhāṣika) の存在の実態は,はっきりしない.それゆえ,アビダルマ文献において,『入阿毘達磨論』で「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」の語を使用するは明らかであるけれども,意図して頻繁に使用したのは,まさに『倶舎論』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

である.

『倶舎論』のサンスクリット原典における 'Vaibhāṣika' の語は, 筆者の調べでは, 69 例があげられる. その内訳は, ① 'Vaibhāṣika' の単独使用が 60 例, ② 'Kāśmīravaibhāṣika' が 2 例, ③ 'Vaibhāṣikanyāya' が 2 例, ④ 'Vaibhāṣikīya' が 2 例, ⑤ 'Vaibhāṣikapakṣa' が 1 例, ⑥ 'Vaibhāṣikamata' が 1 例, ⑦ 'Vinayavaibhāṣika' が 1 例である. これらの中で, ① 'Vaibhāṣika' の単独使用・② 'Kāśmīravaibhāṣika'・⑦ 'Vinayavaibhāṣika' については, いずれも複数形 (pl.) で使用されている.

ここで, 『倶舎論』中の 'Vaibhāṣika' についてみてみよう. 「界品」の有為法の異名では, 「世路 (adhvan)」・「言依 (kathāvastu)」・「有離 (saniḥsāra)」・「有事 (savastuka)」があげられるが[7], この中の「有事 (savastuka)」の説明で以下のように述べられる. すなわち,

> 原因を有するから有事である. 伝説では, 原因 (hetu) という語は事 (vastu) の語である, と毘婆沙師 (Vaibhāṣika) たちは [いう][8].

とある. この一節の中の毘婆沙師 (Vaibhāṣika) の主張については, 『大毘婆沙論』中の「諸因以事聲説[9]」という記述に跡付けられることが先学によって指摘されている[10]. それゆえ, 上記の『倶舎論』中の 'Vaibhāṣika' は, 「毘婆沙論」に依拠してその権威を認める集団を指しているといえる.

また, 「界品」では「蘊」の意味について引用された経典の中に「過去・未来・現在」, 「内なるもの・外なるもの」, 「粗雑なもの・微細なもの」, 「劣ったもの・優れたもの」, 「遠いもの・近いもの」という記述がある[11]. これらの中で, 「粗雑なもの (audārika)・微細なもの (sūkṣma)」の説明において, 「毘婆沙師 (Vaibhāṣika) たちは [九] 地 (bhūmi) にしたがって」と, 毘婆沙師 (Vaibhāṣika) の主張した解釈が説示されている[12]. しかしながら, この「地にしたがって」という毘婆沙師 (Vaibhāṣika) の主張は, 玄奘訳『大毘婆沙論』だけでなく, 60 巻『阿毘曇毘婆沙論』や 14 巻『鞞婆沙論』に関係する記述を見出すことができない. 先学によると[13], 上記の主張については, 『雑阿毘曇心論』中の「粗雑なものは五識身であって, 微細なものは意地である. 汚れたものや汚れていないものや界地も同様である[14].」という記述との関連が指摘される. この関連にしたがうならば, 「毘婆沙論」の綱要書にまで, 'Vaibhāṣika' の語が適用されている. それゆえ, 上記の 'Vaibhāṣika' は, 「毘婆沙論」に間接的に依拠したものとみなすことができる.

従来, 「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」は, 「毘婆沙論」に依拠しその権威を認める集団を意味するとされている. しかし, 『倶舎論』の記述にもとづくならば, 厳密

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

には,「毘婆沙論」に直接的に依拠するだけでなく,「毘婆沙論」の主張にもとづく綱要書などへの依拠,つまり,「毘婆沙論」に間接的に依拠した集団をも含んでいると理解できる[15].

4. 世親の意図と「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」

『倶舎論』中の毘婆沙師 (Vaibhāṣika) が,直接的に,あるいは,間接的に「毘婆沙論」に依拠する集団であることが明らかになった.これは,「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」に対する従来の解釈を大きく逸脱するものではない.ところが,「三世実有説」の説明の中では,世親は毘婆沙師 (Vaibhāṣika) の意見として,

> しかし,毘婆沙師 (Vaibhāṣika) たちは [次のように主張する].「過去と未来は絶対にある.決定できないところのものに関して,自らのものを愛する者によってこそ,このように知られるべきである.実に法性は甚深である.(5–27d) 必ずしも論理によって証明されない.」と[16].

と引用している.この中の毘婆沙師 (Vaibhāṣika) の主張については,現存する「毘婆沙論」だけでなく綱要書の中にも見出すことができない.「毘婆沙論」への依拠ということを,口頭伝承や未発見の「毘婆沙論」にまで適用拡大して解釈することも可能かもしれないが,衆賢の『順正理論』では,この記述に対して,

> 【原文】『阿毘達磨順正理論』巻 52, 634c22–24: 仁竊自造論矯託題以毘婆沙名.眞毘婆沙都無此語.
> 【現代語訳】君はひそかに自ら論を捏造して,偽って題を言付けるにあたって「毘婆沙」という名前を使う.真実の「毘婆沙 [論]」にはすべてこれらの文言はない.

と述べられている.ここで衆賢は,世親が毘婆沙師 (Vaibhāṣika) の主張として引用した一節は,「毘婆沙論」に跡付けることができないとし,引用そのものが,まさに世親の捏造だと批判しているのである[17].それゆえ,衆賢の意見にしたがえば,『倶舎論』中の毘婆沙師 (Vaibhāṣika) の主張には批判を前提とした世親の自説も含まれていると解釈することができる.

また,称友の *Abhidharmakośavyākhyā* における 'Vaibhāṣika' の定義では,

> 「毘婆沙」と戯れるから,あるいは,[「毘婆沙」に] 専心しているいるから毘婆沙師である.あるいは,また,「毘婆沙」を知るから毘婆沙師 (Vaibhāṣika) である[18].

と述べられている.「毘婆沙」と戯れる,という称友の第一の定義を重視するならば,「毘婆沙」と戯れる集団という侮蔑の意をこめて,世親が『倶舎論』で「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」という語を使用したという解釈も可能である.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

5．結

「毘婆沙師（Vaibhāṣika)」は，「毘婆沙論」に依拠しその権威を認める集団を意味するとされてきた．「毘婆沙師（Vaibhāṣika)」の語は，現存する資料では『入阿毘達磨論』での使用が最も古いと断定できるが，その実態を明確に知ることはできない．「毘婆沙師（Vaibhāṣika)」の語が意識して使用され始めたのは世親の『倶舎論』においてである．『倶舎論』中の「毘婆沙師（Vaibhāṣika)」は，従来の解釈の通りに，「毘婆沙論」に依拠しその権威を認める集団ということが確認されるが，「依拠」という点をさらに厳密にすると，必ずしも直接的に現存する「毘婆沙論」への依拠だけでなく，「毘婆沙論」の学説に基づいた綱要書への依拠をも含むと考えられる．また，『順正理論』に記述によると，『倶舎論』中の毘婆沙師(Vaibhāṣika)の主張は単に世親の自説を展開しているという側面も認められる．したがって，『倶舎論』中の「毘婆沙師（Vaibhāṣika)」は，「毘婆沙論」に依拠しその権威を認める集団（説一切有部）と，世親が自説を展開するために批判対象として設定した集団，という二重の意味が存在する．さらに，称友の「『毘婆沙』と戯れる」という解釈を重視するならば，侮蔑の意をこめて世親が「毘婆沙師（Vaibhāṣika)」の語を使用したとも考えられる．

1）『阿毘達磨倶舎論』巻19，大正29，103a11.　2）*Abhidharmakośabhāṣya*, 291, 12–13.『倶舎論』のサンスクリット原典には，*Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, ed. by P. Pradhan, Patna: K. P. Jayaswal Reserch Institute, 1967を使用する．なお，原文にある‘vipākajā-’については，小谷信千代・本庄良文『倶舎論の原典研究　随眠品』大蔵出版，2007年，p. 95，注2にしたがい，‘vipākajā’に訂正した．　3）『阿毘達磨倶舎釋論』巻14，大正29，256c7.　4）『大毘婆沙論』巻153，大正26，80b12–14.　5）*Prakaraṇābhidharmāvatāra*, Peking ed., Vol. 199, 398a1.　6）なお，『入阿毘達磨論』には，「毘婆沙者立無記根唯有三種．謂無記愛無明慧三．(『入阿毘達磨論』巻上，大正28，982c15–16)」とあるが，チベット訳には当該の一節が欠けており，「毘婆沙師(Vaibhāṣika)」の語の使用は確定できない．なお，この欠如については，櫻部建『佛教語の研究』，文栄堂書店，1997（1975）年，p. 207，注4で言及されている．　7）*Abhidharmakośabhāṣya*, 5, 2.　8）*Abhidharmakośabhāṣya*, 5, 6–7.　9）『大毘婆沙論』巻196，大正26，980b29.　10）佐伯旭雅編『冠導阿毘達磨倶舎論』I，法蔵館，1993（1976）年，p. 9. Ejima Yasunori ed., *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu Chapter I: Dhātunirdeśa*, 1989, Tokyo: The Sankibo Press, p. 6, n. 12.　11）*Abhidharmakośabhāṣya*, 13, 5–7.　12）*Abhidharmakośabhāṣya*, 13, 12.　13）Ejima 前掲書，p. 20, n. 8.　14）『雑阿毘曇心論』巻1，大正28，871b25–26.　15）本稿は現存するテキストで考察を試みたものである．間接的な依拠ということについては，「口頭伝承」も含まれ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る可能性もある．また，世親が引用した「毘婆沙論」は，未発見の「毘婆沙論」という可能性もある．これらのことについては，今後さらに検討を加えたい．　16) *Abhidharmakośabhāṣya*, 301, 10–13. なお，原文にある 'yatra' については，小谷・本庄前掲書，p. 144，注 46 にもとづき 'yan na' とする．また，原典にある 'tarhyasādhyā' については，平川彰他『倶舎論索引』大蔵出版，1973 年，p. 433 や小谷・本庄前掲書，p. 144, 注 47 にもとづき 'tarkasādhyā' とする．　17) 本稿では，提示した『順正理論』の記述に関しては，世親が「毘婆沙師 (Vaibhāṣika)」の語をいたずらに使用したことに対する衆賢の批判であると解した．しかし，世親が提示した「(現在のように) 過去・未来も存在する」という一節に対する批判とも解することもできる．なぜならば，三世の様態はそれぞれ別であるため，三世を同じように理解できないというのが毘婆沙師の主張だからである．しかし，この一節に対する批判は，本稿であげた『順正理論』の記述のあとで展開するトピックである．衆賢の批判の意図については，今後さらに検討を加えたい．　18) *Abhidharmakośavyākhyā*, 12, 7–8. なお，*Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā: the Work of Yaśomitra*, ed. by U. Wogihara, Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1936/ 1971/ 1989 を原典とした．

〈キーワード〉 説一切有部，毘婆沙論，Vaibhāṣika，世親，衆賢

(名古屋大学非常勤講師，博士 (文学))

新刊紹介

並川　孝儀　著

『インド仏教教団　正量部の研究』

A5 版・446 頁・本体価格 9,000 円
大蔵出版・2011 年 11 月

NII-Electronic Library Service